

2021年5月9日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「主の選ぶ断食」イザヤ書58章6～14節

主任牧師 加藤 誠

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて／虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること」(イザヤ書 58 章 6 節)。

イザヤ書は、「旧約聖書」と「新約聖書」をつなぐ「架け橋」的な役割を担っている大切な預言書です。イザヤ書が書かれたのはイエス・キリストが誕生する六百年も前ですが、キリストの救いの働きを見事に指し示している言葉が多くあります。

例えば、イザヤ書は「異邦人」(異教徒)を大切な礼拝の仲間とみています。これは当時のユダヤ教の教えを根底から揺さぶることでした。主流派の教師たちは皆、「異邦人とは仲良くするな。イスラエル民族の血統を大切に守れ。異邦人と結婚すると汚らわしい教えが混じってしまう！」と異邦人を厳しく排除したのに対して、イザヤは「異邦人も大切な礼拝の仲間だ」と語りました。異邦人の中に「イスラエルの我々が見習うべき信仰、学ぶべきものがある」と考えたのです。そして「わたしの家はすべての民の祈りの家と呼ばれる」という神さまの言葉を取り次ぎました。

このイザヤの言葉を六百年後に主イエスは見事に言葉と行動にしました。ローマの百人隊長が自分の召使いの病気を癒してもらうのに「主よ、あなたの言葉だけで十分です」と言った時、主イエスは弟子たちに「見よ、このローマ人の言葉を聞いたか。イスラエルでもこのような信仰は見たことがない」と言って喜ばれました。またエルサレム神殿では「わたしの父の家はすべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」とのイザヤの言葉を引用して、人々の献金の両替でひともうけを企んでいる商売人たちを「お前たちは強盗と同じだ！」と言って追い出したのでした。

あるいは、今朝ご一緒に読んだ「断食」についての教えもそうです。当時、人々は断食を大切にしました。神さまに悔い改めをあらわす時や切実な願いごとをする時には「断食」をして神さまへの信仰の真剣さを示したのですが、イザヤは人々の「断食」が形式的で偽善的なものであることを鋭く批判し、「あなたがたの神さまへの信仰が心の底から本物であるというのなら、虐げられた人を解放し、飢えた人にあなたのパンを与え、さまよう貧しい人、裸の人を家に招き入れることができるか。神さまを愛するように、隣り人を愛すること。それこそが神さまの求めておられる信仰ではないか。それをしようともせず、口先だけ『断食』していますというのは偽善に他ならず、神さまはお喜びにならない」と語ったのです。

そして主イエスはこのイザヤの言葉をそのまま行動であらわされました。ある安息日のこと。主イエスの弟子たちが畑の中に入って麦の穂を摘んで食べていると、「お前さんの弟子たちは断食もせず、何という不信仰で罰当たりなことをしているのか！」と非難されると、「安息日は、貧しくお腹を空かせている人たちが、神さまを喜んで礼拝するための日ではないか！」という意味のことを語られて、貧しく

お腹を空かせた人たちがすぐ近くにいながら、その隣り人の傍らを素通りして、ただ礼拝と断食をしているような信仰を厳しく批判されたのです。

神さまへの信仰は「形」ではなく、「信仰をどう生きるか」が大切。

神さまの無償の愛を感謝して受けた者が、神さまが一番喜ばれることは何だろうかと考え具体的に応答していくこと。神さまが愛され大切にされている隣り人を、わたしも自分のように大切にしていくこと。

イザヤが今朝 58 章で語り、また主イエスがその言葉と行動で示されたことは、「ほんとうにそうだ」と頷かざるを得ないものですが、けれども実際の自分自身の信仰を見つめた時に、何と厳しく、難しい教えだろうかと問われます。聖書から「愛」を学びながら、その「愛」をどこまで自分の生活の中で具体化できているだろうか。信仰とは名ばかりで実質の伴っていない、ほんとうに恥ずかしく貧しいわたしの信仰を問われるのです。

今朝、新田義貴さんが日本で暮らしているミャンマーの人々の教会を訪ねた証しをしてくださいました。彼らの生き生きとした信仰は、彼らの暮らしとしっかり結びついていて、神さまから自分がいただいた愛を具体的に誰かと分かち合おうとしている、その純粋さに教えられます。4 月 18 日に新田さんと五十嵐友香里さんが東中野のミャンマーのチン族の教会を訪ねた直後に、こんなことがあったと教えてくれました。「教会を訪ねた後、教会のメンバーたちが二人を家に招いてミャンマーの食事をふるまってくれた。そのお礼を何らかの形でしたいと申し出ると、『わたしたちは十分恵まれています。私たちよりも厳しい状況にある人たちのためにしてあげてください』という答えが返ってきて、自分たちよりもずっと若い彼らの信仰に深く教えられた」と。

私たちは日本での暮らしのレベルが当たり前になっていて、世界でほんとうに厳しいギリギリの暮らしをしている人たちのことが分からないでいる。私たち日本人は自分の暮らしがまず十分に確保されることを第一に考えているけれど、ミャンマーの彼らは今、厳しい思いをしている人たちとどうやって一緒に生きることができると第一に考えているように思います。その点で、私たちは、神さまの思いをどこまで真剣に大切にできているか。日本で暮らすミャンマーの友から、鋭く問われ、深く教えられる思いがするのです。

新しい礼拝堂の姿がだんだんと見えてきました。工事が始まった頃、ある朝、教会の門の前で幼稚園のお母さんから語りかけられた言葉が忘れられません。

「これからの時代、ますます教会の働きが必要とされるようになりますね。新しい礼拝堂が建ち上がるのが楽しみです」と。地域の方たちが、幼稚園の方たちが新しい礼拝堂を楽しみにしてくださっています。その礼拝堂で私たちはどのような礼拝を、誰と一緒にささげていくのか。私たちの信仰を深く聖書に養われて、少しでも主イエスと共に歩む教会として建てられていきたいと願います。